The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	汪曾祺作品の形成過程についての一考察
Author(s)	張, 煜
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　張 煜　　）	
論文題名	汪曾祺作品の形成過程についての一考察

論文内容の要旨

汪曾祺（1920-1997）は中国現代・当代作家の一人である。汪は五四新文学の影響を受けて1930、40年代に創作をはじめ、文壇にデビューする。後に、文学創作の空白期（1949-1979）を経験し、1980年代に文壇に再登場した。

1980年代、中国文壇は「十七年文学」、「文革文学」を経験した後、「傷痕文学」、「改革文学」、「尋根文学」等多種多様な文学形式の出現を迎える。その中で、汪曾祺は小説「受戒」（1980）をもって新時期文学に向けて再出発した。数多くの文学形式の中で、汪の清新な作風は注目を集め、当時の文芸評論界で「汪曾祺ブーム」を引き起こした。その後、汪は他の文学流派とは異なる作風で、中国の新時期文学に数多くの文学作品を残した。

汪曾祺の創作は1930、40年代のデビュー期から1980年代の作品の成熟期に至るまでに、方式、形式、手法等の変化を経験してきた。本稿は汪の創作時期を区分・整理し、汪の各創作時期の人生経験、作品形式、特徴、手法の運用、及び受けた影響や後の創作時期に影響を与えた創作時期について考察する。とりわけ、晩年期作品が集大成を迎え、現在に至っても大きな影響力を持つ原因についての検討を行う。また、これらの作業は、五四時期以来の中国文学史の一側面についての考察でもあり、今後の課題につながる基礎的研究でもある。

本稿の構成は、先行研究についての言及（序章）、汪曾祺の創作生涯における各時期、すなわち幼少期、青年期、中年期、晩年期についての考察（第一章～第四章）、まとめ（終章）からなる。各章の内容概要を以下のようにまとめる。

序章では、まず汪曾祺研究の二つの発端と「新時期」以来の汪曾祺研究の主要状況を整理していく。汪曾祺研究が文芸界に大いに注目されはじめた大きなきっかけの一つは1988年末に『北京文学』が主催した「汪曾祺作品研討会」であった。この討論会での討論は後に『北京文学』の1989年1月号に掲載された。もう一つは1993年第1期の『当代』誌の「汪曾祺評論小輯」が、汪曾祺作品の評論文や感想文を収録し、その評論特集を出したことである。この二つのイベント、とりわけ『北京文学』に掲載された「汪曾祺作品研討会」での議論は、後の汪曾祺研究を方向づけるものとなった。次に、本章は1980年代以降の汪曾祺研究の特徴をまとめていく。1980年代以降の汪曾祺研究は主に以下の三つの面に集中している。1、汪曾祺小説研究。主に小説の言語、その伝統と意義、文体風格、及びリアリズムや小説の審美等に収斂する。2、汪曾祺作品の比較研究。例えば、汪曾祺と沈従文の作品の比較研究等。3、汪曾祺散文とその他の文体に関する研究。そして最後に、本稿と関連するいくつかの先行研究を具体的に整理し、そこにおける問題点を指摘する。数多くの研究者の分析や論点は大いに参考になるが、汪曾祺作品に対する多元的な理解と分析については十分とはいえないと筆者は考える。例えば、1、汪曾祺の青年期には、意識の流れ小説の創作以外に、晩年期作品と連続性を持つ作品も存在していることが看過されてきた。2、中年期における革命模範劇「様板戯」（以下、「革命模範劇」）の創作が晩年期小説に与えた影響についての分析が欠如している。3、汪曾祺の晩年期創作におけるモダニズムの手法は全く重視されてこなかったといった点である。

本稿は先行研究におけるこの三つの問題点を重点的に検討し、また汪曾祺の作品創作に素材を提供した幼少期をも検討対象とする。すなわち、汪曾祺の生涯を幼少期、青年期、中年期と晩年期の四つの時期に区分し、各時期と作品創作の関連をそれぞれ検討する。そして汪曾祺及び汪の作品の現代文学、当代文学における位置づけを分析し、汪曾祺と「先鋒文学」の関係についても言及した上で、中国現当代文学の発展の軌跡の一側面を考察し、今後の課題を研究する上での基礎づけを行う。

第一章では、汪曾祺の幼少期（1920-1939）を扱う。主に、汪曾祺が幼少期で受けた古典文学の影響とこの時期の経

験が後の作品に与えた影響という二つの面から検討していく。まず、汪は伝統文化の教育を受け、とりわけ書画等に関する伝統教育は後の創作や手法に大きな影響を与えた。本章はいくつかの作品を素材としてそれを説明していく。そして、幼少期の経歴は汪の創作の題材の源であったことを分析する。小説「受戒」（1980）のように晩年期の多くの作品の題材は、幼少期の故郷観察に由来するものである。

第二章では、青年期（1939-1949）を分析対象とする。本章はまず汪の青年期の経歴と作品を紹介し、そして、この時期に創作された「復讐」（1941）のような意識の流れ小説、「鶏鴨名家」（1947）のような故郷高郵を題材とする小説の創作特徴や手法を分析する。最後に、恩師沈従文、西南聯合大学の文学環境、時代背景という三つの面から受けた影響を通して、汪の創作初期の文学観を考察してみる。

第三章では、中年期（1949-1979）、すなわち汪曾祺の文学創作の空白期を扱う。この時期、汪は京劇や革命模範劇の創作に集中し、小説作品はわずか三篇しか創作しなかった。本章は、まず汪の中年期の経歴と作品を紹介し、汪が1955年に改編した京劇脚本「范進中挙」（原作呉敬梓『儒林外史』、清朝古典小説）を例にして、京劇脚本の改編過程から汪の京劇創作の特徴や初期創作との相違点を検討する。次に、「沙家浜」を例として汪の革命模範劇の脚本の創作と改編の特徴とその原因を考察し、革命模範劇の改編の成果を改めて強調する。最後に、中年期に創作した三篇の小説、「羊舎一夕」（1961）、「王全」（1962）、「看水」（1962）について分析し、小説のリアリズムの特徴とそこに反映される30年間の空白期における汪の生活の実態を明らかにする。

第四章では、汪曾祺の晩年期（1979-1997）を検討する。1980年代の新時期文学に、汪曾祺は小説「受戒」（1980）で再登場した。本章は、まず汪の晩年期の経歴と創作過程や創作形式を紹介し、晩年期において最も特色を持つ創作は改作小説と風俗画小説であることを明らかにする。そして、改作小説「異秉」（1981）とその原作（1948）との対照分析を通して、両者の構成、言語、手法上の相違点を分析する。最後に、「受戒」（1980）、「大淖記事」（1981）等といった風俗画小説を取り上げ、風俗画小説の構成、言語、創作手法のそれぞれの特徴を分析し、またそのそれぞれの特徴によって作り上げられた作品の雰囲気や登場人物の人物像等についても考察を行う。

汪曾祺の創作生涯の各時期を考察することによって、以下のように結論付ける。

1、幼少期の経験は汪の創作に広範な題材を提供し、またこの時期に受けた古典文化の影響が汪の作品形式を多様化させた。

2、青年期には大学において、五四文学の薫陶や、恩師沈従文、西南聯合大学の文学環境、外国文学の思潮といった影響のもとで文壇にデビューした。またこの時期、汪は意識の流れ小説の創作を試み、このことは大きな実践的な意味を持った。

3、中年期の汪は文壇を離れたが、「下放」労働の生活や「革命模範劇」の創作と改編が、汪の晩年期の創作に初期作品とは違った題材や経験を提供した。この時期は汪の創作生涯の蓄積期であった。

4、汪の晩年期の創作は、独特な作風を持つ「汪曾祺式小説」が作り上げられた。これは政治と文学ジャンルの制限を打破したものであり、その創作手法はモダンからリアリズムとモダニズムの融合に回帰した。また晩年期の創作は、文学そのものという本質への追求を意味したものであった。

最後の終章では、全体をまとめた上で、中国現当代文学における汪曾祺作品の位置づけを検討し、以下の二つのように結論付ける。1、中国現代文学（1919-1949）において、汪は五四文学の影響を受け、多元的創作を試みようとする青年作家であり、中国初期の意識の流れ小説を実践した一人であった。2、中国当代文学（とりわけ1980年以降）において、「先鋒文学」とのつながりや汪の作品の特徴から、汪の晩年期作品は「先鋒的意識」を持つものといえ、各文学類型の間に存在しつつも、いかなる流派や類型にも属さない。汪の1980年代以降の作品は五四文学の影響下で創作された初期作品と連続性をもっており、他の文学類型とはそれほど大きなつながりをもたないと考えられる。

最後に、今後の課題を提起する。それは、汪曾祺の創作生涯が五四時期以来の中国文壇の発展の一側面を反映しているとすれば、1949年以降の中国文学ないし中国語文学において、汪のような五四文学の創作伝統を一貫して継承してきた他の作家や文学流派はどのような軌跡をたどってきたのかという問題である。例えば、中国古典小説、五四文学伝統、それに汪曾祺のような作家らの影響を受けた「先鋒文学」はどのような発展をたどってきたのか。これらの問題を今後の課題として検討したい。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　張　煜　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	青 野　繁 治
	副 査　准教授	今 泉　秀 人
	副 査　准教授	林　初 梅
	副 査　教授	渡 邉　克 昭
	副 査　教授	高 階　早 苗

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国の1980年代以降、もっとも評価が高く、注目されてきた作家の一人である汪曾祺の文学を扱い、その人物形成期から晩年にわたる文学的営為の全体像を視野に入れた意欲的な論文であり、日本語で書かれた数少ない汪曾祺に関する論考であるとともに、汪曾祺の文学を全体的に扱った初めての日本語論文である。汪曾祺が1930年代から40年代にかけて創作を始め、1949年から1979年の「空白期」を経て、1980年代に文壇に再登場した経歴に注目し、それらの時期において、小説以外の創作活動も含めて、さまざまな活動に従事するなかで得たものが、最終的に1980年代の活発な小説創作活動を準備し、後進の作家たちに大きな影響を与えたということを明らかにするものである。

論文は「序章」から「終章」までの全6章からなる。

「序章――汪曾祺研究に関する先行研究と本稿の目的」は、膨大とも言える中国における汪曾祺研究の内容を整理しつつ、「汪曾祺作品の形成過程」に注目した研究に検討を加え、西洋モダニズムの影響を受けた青年期の作品と晩年の風俗抒情式小説（風俗画小説）とに連続性があること、空白期ともされる中年期のわずか3編のリアリズム小説と革命模範劇の執筆を否定すべきでないこと、晩年はリアリズムに回帰したとされるが、モダニズムも捨てておらず、より成熟した用い方がなされているなどの問題点を抽出した。

「第一章　文学の源――汪曾祺の幼少期（1920～1939）」は、汪曾祺の散文作品を参照しながら、幼少期の父親による家庭教育と「書画同源」「書画相通」という中国古典文化における美意識の形成を指摘し、後の文学作品にそれがどのような形で表れたかを論じている。

「第二章　文学創作の開始――青年期（1939～1949）」は、1939年の西南聯合大学（昆明）入学から、上海の致遠中学教員時代、北京歴史博物館時代を経て漢口の第二女子中学教員時代を扱っている。汪曾祺は、各所を転々としながら十数編の小説を発表しているが、この時期の作品に現れる沈従文ら西南聯合大学の学問的影響と西洋モダニズムとくにヴァージニア・ウルフの受容を、具体的な作品分析と汪曾祺自身のエッセイによって跡づけている。

「第三章　文学作品の空白期――中年期（1949～1979）」は、社会主義政権となり、『北京文藝』の編集者となった汪曾祺は、『儒林外史』に取材した「范進中挙」など京劇の台本を執筆したが、1957年の「反右派闘争」において、「右派」のレッテルを貼られ、職務を解かれると同時に、下放労働に送られた。そこで初めての肉体労働を体験し、わずか3編だがそれを小説に描いている。これらの体験が後の作品執筆に際し、新たな題材を蓄積した、と指摘している。文化大革命の開始後は、革命現代京劇「沙家浜(さかほう)」の台本を執筆し、そのなかで古い京劇の歌による心理描写を意識の流れ的な独白のセリフにまで広げ、京劇改革のなかに密かにモダニズムの手法を持ち込んだ状況を指摘し、京劇台本を執筆した経験が、将来の小説言語にも影響を与えた、と論じている。

「第四章　文学創作の発酵期――晩年期（1980～1997）」は、文化大革命収束後、文化大革命の傷跡を描いた「傷痕文学」や社会改革を訴えた「反思文学」が文壇を席巻するなか、「受戒」という特異な作品で文壇に再登場した汪曾祺作品の意義を分析している。この時期の作品は数が多いので、自

分の過去の作品を改作した「異秉」や『聊斎志異』を改作した『聊斎新義』などの改作小説、幼年期の体験を題材とし古典画の世界を文学に再現しようとした「大淖（だいどう）記事」「受戒」などの風俗画小説、に重点を置いて論じているが、改作小説の分析を通じては、その言語表現の洗練されていく過程が明らかになっており、また風俗画小説の分析において、モダニズムを経てリアリズムに回帰したとされる当該作品が、実は「作家の介入」によって、相対化され、非現実的な理想の夢の世界（僧が嫁をとり、肉を食う、それを封建制度に縛られない女が主体的にリードする物語）として物語が結ばれる、という指摘は興味深いものである。

「終章　汪曾祺作品の形成過程とその位置づけ」は、まず第1章から第4章までに論じた内容のまとめを行ない、それを中国現代文学および当代文学における位置づけを行なっている。特に汪曾祺と「九葉詩派」との関係、技法上、朦朧詩派や格非など先鋒文学の作家に与えた影響などが指摘されている。

日本では個別の作品や手法に視点をしぼって論じられる傾向にある汪曾祺であるが、本論文は汪曾祺文学の形成から影響までを論じたものとしては初めての日本語論文であり、小説作品が少なく、ほとんど顧みられなかった「空白期」の汪曾祺の活動にも目を向け、労働改造や革命現代京劇の創作にも大きな意義を見出していることは、注目に値する独自の視点である。晩年の作品分析に「風俗画小説」という概念を導入したことで、汪曾祺研究だけではなく、中国文学全体に読みの可能性を広げたのではないかと思われる。論文では触れられていないが、莫言、余華、阿城、賈平凹といった80年代90年代を代表する作家たちへも大きな影響を与えた可能性が、本論文の分析内容から見てとれる。

日本語の表現に意を尽くせない部分や細かい表現上の誤りが多くあり、訳語が統一されていなかったり、全体の構成もまだ十分考え尽くされていない側面がないわけではない。また先行研究の扱いにも欠点を残しているが、全体として論文の価値を損なうものではない。

以上の分析をふまえ、論文審査担当者は、全員一致で、本論文を博士（言語文化学）の学位を授与するに値する論文であると判断した。